高松、杵島で集会

総ての斗いを統一行動で

六月四日、安保体制打破、政暴法粉砕、合理化反対、生活と権利を守る福岡県民大集会が無期限ストで闘う日炭高松でひらかれ五万人が結集。同じく七日、無期限ストで闘う杵島で一万人が結集して共に盛大にひらかれた。安保、三池の炎が今こそ高くかかげられ、統一行動は発展し大きくひろがつている。（写真は上が杵島、下は高松の大集会）

戦線を拡げよう

杵島では一万人が結集

「池田政府と独占資本は日米安保体制を強化するため一連の反動政策を強行してきた。防衛二法、政暴法、農基法、ILO条約批准に関連する国内法の改悪など……このような情勢の中で杵島炭鉱の労働者は、冷酷非情な合理化攻撃と対抗し無期限ストライキを闘つている」という六・七大会参加のための総評アピールの呼びかけにこたえ、六月七日午後一時半から杵島炭鉱旧坑木置場を会場として、〝安保体制打破・合理化反対・杵島支援総決起大会〟がひらかれた。

会場には、県下はもちろん全九州山口の労働者によつて埋めつくされ、杵島炭鉱支援、政暴法粉砕の二大決議と大会宣言を採択し、あすからのたたかいにそなえた。

会場選びも闘いとして討議

大会会場は選炭機とホッパーがすぐそこに見える旧坑木置場広場に設けられた。

いままで杵島で大会といえば、テニスコートと大体きまつていたようなものだが、こんどは会場を選ぶことも〝たたかい〟として討議されたという。

その結果、会社の生産設備（搬取の機械）のそばで、そしてその搬取機構の一部が、労働者の力（スト）で、みにくい姿を見せてストップさせられている場所で、ということでここになつたものだという。

高松に匹敵する参加

昨年の三池闘争のときの大集会ごとに会場をいろどり、なじみのふかい総評の大寄せ旗が、この大会でふたたび労働者と会見した。

この大寄せ旗は、杵島労組が大会前日に三池労組からとりよせたものであつた。

午後一時三十分、社共両党代表、岩井総評事務局長をむかえ、一万人の大集会がはじまつた。

高松から参加した組合員が「日曜日じやないし、佐賀は福岡とくらべ、組織労働者はうんとおいだろう。それにこれだけ集まりや、高松での五万人の集会に匹敵する。やつぱりたいしたもんばい」と感想をもらしていた。

大会はことしになつて最高の暑さの中ですすめられ、議長団、歓迎あいさつ、炭労代表、総評代表、社会党も共産党も合理化、政暴法—すべての国民生活を圧迫するものがアメリカ帝国主義と日本独占の同盟新安保条約からきていることが訴えられた。

杵島支援体制とろう

特別報告に立つた総評岩井事務局長は、一万人の労働者に向いみなさん方自身が団結の中心になつてその〝をひろげてほしい昨年の三池で、われわれ労働者は人億から九億のカンパを集めることができた。

私がここにきたのは、政暴法という悪法を実際的に闘うためには、合理化反対闘争を成功させることが民主主義政治を確立する道であるからである。

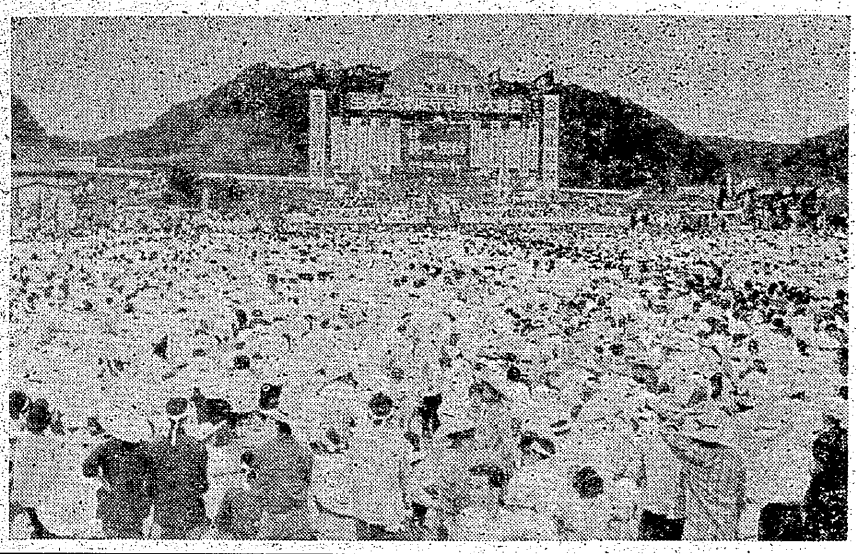
われわれは杵島闘争のために援助体制をとることを約束する。杵島の同志たちが最後まで団結を守り、たたかつてほしい。

このあと、社会党勝間田氏から石炭政策変更闘争についての報告がされ、決議、宣言にうつつた。

政暴法と合理化は一つ

政暴法粉砕決議は「日本の反動支配勢力がこれまでにつくつてきた破防法、刑法、公安条令その他の弾圧法規の総元締めともいうべき法案であり、国民がきづいてきた日本の民主主義を根本から破壊しようとする空前の悪法である」このために団結し、ふんさいするため闘う決意を明らかにしたものである。

一方、支援決議は「この闘いは全国民の生活と権利を守るとともに日本の平和と独立の闘いである」と規定、政暴法をふんさいする闘いと合理化をふんさいする闘いの目的と方向が同一のものであることを明らかにし「われわれは大会に参加した全労働者の名において全国労働者の団結の力で安保体制を打破し、政暴法、ILO関連法規の改悪などの反動政策をふんさいし、首切り合理化と対決し、政策変更への闘いを力強くおし進めることを誓う」と決意した。



統一！そこに勝利がある

大会宣言

▽全国の労働者、農民、市民諸君

アメリカ帝国主義と日本独占はその反動的政策の強行により、その地位を固めているのであろうかいな、逆に彼らはますます政治的孤立を深めている。彼らが最も恐れているのは、われわれがすべての闘争の中で政治的自覚を高め、安保条約を破棄し、国の政策を平和、民主、独立、中立、護憲の道へと変えさせる統一戦線に結集することである。

従つて池田内閣は、ガリオワ、エロア賠金の返済等、日本国民の犠牲によつてアメリカにこびをうりアメリカの軍事ブロック政策にむすびつくことによつて、自からの地位を守ろうとしている。池田渡米は、このあせりの表われであるさまざまな職業と見解をもつ全国の代表が五・七アピールにこたえてこの集会を組織した。参加したすべての代表はそれぞれの要求が、すべてアメリカ帝国主義と日本の独占の安保条約にもとづく諸政策と真向から対立するものであり、この政策をかえねばならぬという点で一致している。

五・七アピールに結集した力は周期的なものであつた。一組合のよびかけに応じて百三十余団体が集つたのは、日本の労働者と全国民が、それぞれ要求の根本的解決のためには安保体制の打破が必要であり、そのためには統一が緊急の課題であることを確認していることを示すものであつた。

五・七アピールは安保闘争、三池闘争の情熱と力を呼びおこす契機となつた。福岡県安保共闘さん下の全民主勢力は、これを出発点として運動を全県にひろげ、再び全国民的闘争の先頭にたつ決意を表明するために結集した。同時に安保共闘全国代表者会議がひらかれ、五・七アピールを支持し、安保闘争に結集した力を再びもえ上らせようとしていることはわれわれの展望を一層明るくしている。こうしてわれわれは国の運命を自からの手ににぎる決定的な一歩をふみだしつつある。

さまざまな意見の相違や誤解がなお、われわれの間に存在する。しかしそれらはわれわれの要求をかちとり、日本の進路をわれわれの手ににぎり、平和、民主、独立中立、護憲の路線に向けるために統一することを妨げるものではない。

それぞれの要求をかちとるために、すべての闘争を安保体制の打破をめざす大統一闘争へと発展させることは決して不可能ではない。この大集会に参加したすべての代表は、高松労組をはじめあらゆる民主勢力の闘争を、この統一行動への拠点として、これを守り、持続させながらそれぞれの闘争を強め、その中で政治的自覚を高め、政府への政策の転換を迫る大統一闘争へと発展させることを決意した。われわれがこの路線を堅持するならば、日米反動の政策を危機におとし入れ、個別の闘争への譲歩をかちとつていくことができると考える。同時にこの路線は全日本人民をはげまし、闘いへの情熱と勝利への確信をよびおこすであろう。

▽全国の労働者、農民、市民諸君

大会は心から諸君によびかける安保闘争の情熱をよみがえらせよう。岸内閣を打倒し、アイク訪日を阻止した確信をとりかえそう。三池の英雄的闘争の伝統をうけつごう。統一してたたかうならば、われわれは勝利する。

いたるところに共闘組織を！

さあ団結してたたかおう!!

一九六一年六月四日

安保体制打破、政暴法粉砕、合理化反対、生活と権利を守る

福岡県民大集会

六・四大会の意義

すべての闘いを統一行動で

解説

〝もえ上る炎も一点の火花から〟という言葉がある。六・四大集会の成功を一口でいえば、この言葉につきるといえよう。

一カ月前、高松労組のよびかけが五・七集会となり百五十団体が集まつた。そして五・七アピールは、わずかの間に全国安保共闘代表者会議で支持され、六月四日には、九州各県の五百団体の代表が集まる大集会となつた。

なぜこのように早くひろがつたのだろうか？　それは何よりもまず、みんなが安保闘争や三池闘争の経験を通じて、労働者の闘いはすべて共通のものであり、統一して闘わなければならないこと、統一して闘えば、政府さえ打倒できることを知つていたからである。

しかし六・四大会は、ただそれだけで成功したのではない。三池をはじめ炭労の各組合ではこれまで勇敢に闘つてきたが、合理化を完全に白紙撤回させることはできなかつた。また国鉄労組公労協でも、賃上げをかちとつたが、大量処分をはねかえすことには成功していない。だから、どうしても一部には、〝合理化はどんなに闘つても勝てないのではないか〟〝闘つても無駄ではないか〟というような敗北感がある。だから、こういう敗北感をなくして、〝どうすれば勝てるか〟という方針をはつきりさせ、統一闘争の経験を、勝利の確信をもつた上で生かしてゆかなければならない。

この大会が成功したのは、高松労組が勝利の方向をはつきりとさせたからこそ、みんなが統一闘争の経験を生かして結集したからである。

これまでの闘争がうまくゆかなかつたのは、五・七アピールがのべているように、力がないから負けたのではない。いまの要求はすべて池田内閣の政策と真向から対立している。だから勝つためのいちばん確かな道は見解のちがいがあつても、すべての人が現在の政府の政策をかえねばならないという点で一致できるし、国民がその民主的権利を手ばなさずに統一して闘つて政府を危機においこむことができるし、国民の生活と権利を守る共闘会議は、そのような統一をひろげる出発点となるにちがいない。

つまり一口でいえば、経済闘争と政治闘争をむすびつけることが大事である。

われわれの弱さは〝力〟があつても、政治的な分裂工作にたいして無防備だつたということ、ただ上部団体や幹部任せでいたということにある。

五・七大会、六・四大会の成功は、高松労組が、政治的統一をひろげながら、そのひろがりによつて、政府の政策を危機においこみ、その中で政治的に譲歩させ勝利するということをその行動で示したことである。もし多くの組合、民主団体が、このようなやり方をひろげ、それぞれの闘争の中で、統一をひろげてゆく努力をすれば、全国的な闘いにすることができるし、その中でこそ、それぞれの闘いもかつことができる。六・四大会は、そのような統一をひろげる出発点となるにちがいない。

いたる所に共闘を

日炭高松で五万人の大集会

「安保体制打破、政暴法粉砕、合理化反対、生活と権利を守る福岡県民大集会」は六月七日、五月十六日から無期限ストで合理化反対をたたかつている日炭高松労組（組合員七、五〇〇人）で開かれた。さきの五・七集会アピール〝いたるところで統一を、いたるところで共闘を〟の呼びかけにこたえて、この日、全九州・山口県から参加した労働者は四百五十団体約五万人に近く五・七集会の二倍をこえる、はるかに大規模の成功をおさめた。

この大集会に大牟田地区安保共闘会議からは貸切バス十五台を仕立てて参加した。このうち三池労組からはバス四台（組合員一五〇名主婦会一〇〇名）・また港務支部潜駅職場分会からも自主的にバス一台を仕立てて参加した。

また、四山支部からは大集会前日からバイク十台で高松に向つた。

午前十一時十分開会、まず高松労組の高野組合長が「われわれは国家独占とその手先きの反動支配勢力とたたかつて、政策転換をかちとる以外に勝利の道はない。生活と権利を守るたたかいを全労働者の統一した力で進めていくことを誓う」と歓迎のあいさつをのべたつづいて社会党代表の加藤勘士氏が「政暴法は民主主義を守ると称して、実は民主主義を圧殺する暴法である。きょうのこの怒りを全国的労働者の怒りのかたまりとして、支配階級にぶつつけよう」とあいさつ、また共産党代表の鈴木市蔵氏は「この大集会は日本の民主勢力が勝てるという道を示している。そこには社共の統一がありまたストをつづける高松のたたかいがあるからである。高松のたたかいを勝たせる道と政暴法をつぶす道はひとつだ」とのべ、満場の共感と拍手をよび起こした。

つづいて、現在闘争中の杵島炭鉱労組、大牟田炭鉱労組、三池炭鉱労組、山陽電鉄労組に支持と激励が送られ、それぞれ代表に高松主婦会から〝折り鶴〟のレイがかけられた。

このあと「五・七アピールを出発点として、すべての闘争を安保体制打破をめざす大統一闘争へと発展させるため、安保、三池のたたかいの伝統をうけつぎ、いたる所に共闘組織を固めよう！」との六・四大集会宣言を採択、また中間市、遠賀郡安保共闘会議の提案で政暴法反対の特別決議とあわせ、六月六日を全県下の統一行動日と決めた。